

(ノート)

佐賀県唐津港に水揚げされるいか類の水揚げ実態

金丸彦一郎

The Fishery Actual Situation of Cuttlefishes Landed at Karatsu Port, Saga Prefecture

Hikoichirou KANAMARU

キーワード：いか類，唐津港，地方名，水揚げ実態

佐賀県玄海地区において、いか類は重要な水産資源の一つとなっている。本報では、唐津港におけるカミナリイカ *Sepia lycidas*、コウイカ *Sepia esculenta*、シリヤケイカ *Sepiella japonica* 等のこういか類、ケンサキイカ *Uroteuthis (Photololigo) edulis*、ヤリイカ *Loligo bleekeri*、アオリイカ *Sepioteuthis lessoniana*、スルメイカ *Todarodes pacificus*、ソデイカ *Thysanoteuthis rhombus* の地方名を整理し、水揚げ実態をとりまとめるとともに、佐賀県玄海地区におけるいか類の研究情報などを整理した。

材料および方法

佐賀県玄海地区にある2つの主要な市場である、佐賀県玄海漁業協同組合連合会魚市場（以下、玄海漁協魚市場と略する）と株式会社唐津魚市場（以下、唐津魚市場と略する）におけるいか類のうち、カミナリイカ、コウイカ、シリヤケイカ等のこういか類、ケンサキイカ、ヤリイカ、アオリイカ、スルメイカ、ソデイカの水揚げ情報について、2003年から2012年までの10カ年間について、月別、年別に集計・整理した。この2市場の水揚量を集計し、唐津港水揚量とした。

玄海漁協魚市場では沿岸のいか釣り、いか籠、刺網、定置網などの漁獲物が主体であり、唐津魚市場では沖合のまき網による漁獲物が主体となっている。

玄海漁協魚市場については、2005年5月までは毎日の

水揚げ伝票から関係魚種の水揚げ箱数を抜き出し、箱当り重量を乗じて月別水揚量を集計し、それ以降は月報から水揚量を整理した。唐津魚市場については、月報から水揚量を整理した。

結果および考察

1. 標準和名と地方名

今回、水揚げ情報として使用した、玄海漁協魚市場の水揚げ伝票、唐津魚市場の月報に記載されている名称（地方名）と標準和名とを表1に示した。

こういか類では、カミナリイカの大型個体は外套部背側の模様から「紋甲いか」と呼ばれているが、模様がはっきりしない小型個体についてはコウイカと区別されていない。シリヤケイカはカミナリイカ、コウイカと比べ単価が安いこともあり、区別されている。

ケンサキイカは、春先に水揚げされる外套背長30cm以

表1 標準和名と地方名

標準和名	地方名
カミナリイカ	紋甲いか (小サイズは甲いかと区別されていない)
コウイカ	甲いか
シリヤケイカ	どうらん、しりやけ、しりぐされ
ケンサキイカ	剣先(けんさき)、すいり、やりいか、ぶどういか、夏いか
ヤリイカ	笹いか、雄(お)いか、雌(め)いか、冬いか
アオリイカ	水いか、藻(も)いか
スルメイカ	(大) がんせき、松いか (小) きんず、きんぞう
ソデイカ	俵いか

上の大型個体を「すいり」と呼んでいる。一方、秋季に水揚げされるずんぐりした体型のものを「ぶどういか」とも呼んでいる。以前は分類学上、別亜種とされていたが、現在は同一種と考えられているケンサキイカは地方名では「やりいか」とも呼ばれ、標準和名のヤリイカと混乱されやすい。呼子のいかとして有名になっている“やりいか”は、主にケンサキイカを指している。

ヤリイカは同じ外套背長のケンサキイカと比べると一般的に外套部の身が薄いことから、地方名では「笹いか」と呼ばれている。春先に水揚げされる大型個体は「おいか」、「めいか」とも呼ばれている。

アオリイカは、玄海漁協魚市場ではトロ箱に6個体並べられる（6入り）程度より大きな、外套背長約25cm以上の個体は「水いか」、それより小型の個体は「もいか」と呼ばれている。ノコギリモク、オオバモク、クロメ等の海藻に主に産卵され²⁰⁾、小型の個体から藻場の近くで見られることから「藻いか」と呼ばれている。

スルメイカは、産卵のため日本海を南下し、秋～冬季に水揚げされる大型個体は、ケンサキイカに比べ身が硬いという意味で「がんせき」、「松いか」と呼ばれている。全国的にみれば「まいか」と呼ばれるなど、ポピュラーな種ではあっても、身が柔らかく美味しい時期には近海で獲れないことから、このような不名誉な名前が付けられている。一方、産まれてすぐ、日本海を北上していく時に採捕される小型個体は「きんず」、「きんぞう」等と呼ばれている。

ソデイカは、俵のように大きいということから「俵いか」と呼ばれている。バブル景気の1990年頃までは、11月後半に行われる大相撲九州場所の頃に鎮西町の漁港内等に流れてきた個体を網ですくって市場に出すと1個体で1万円ほどの高値で取引されていたものの、その後は2～4千円と安くなってしまったと漁業者の嘆きの声も聞かれていたが、近年は安値のまま安定している状況にある。

2. 年間水揚量の推移

2003年から2012年までの10カ年間に唐津港で水揚げされたこういかに類、ケンサキイカ、ヤリイカ、アオリイカ、スルメイカ、ソデイカの年間水揚量を図1に示した。

こういかに類の水揚量は30～53トンの範囲で推移しており、やや減少傾向がみられる。農林水産統計によると

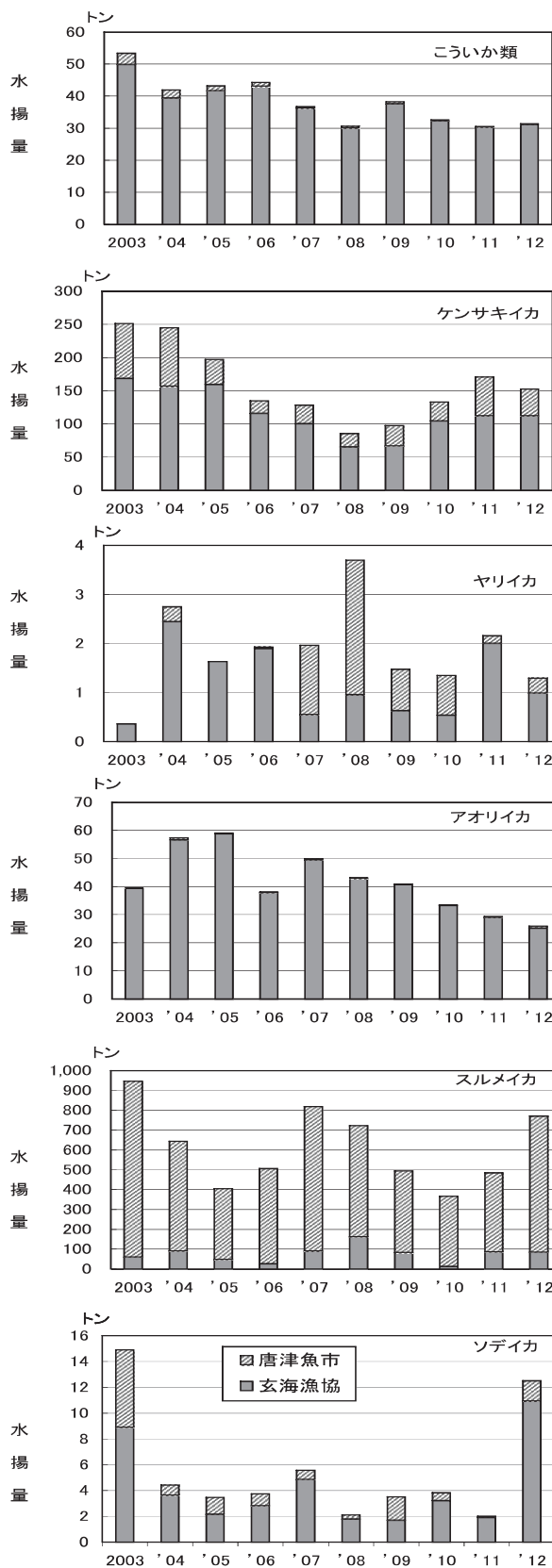


図1 唐津港で水揚げされたいかに類の年間水揚量の推移 (2003～2012年)

1985～1995年には100～200トンの漁獲があった¹⁾ことから、長期減少傾向にあるものと考えられる。

ケンサキイカ水揚量は85～251トンの範囲で推移している。08年が最も少なくなっているのは、燃油高騰の影響を受けている可能性もある。その前の期間1992～2002年の年間水揚量は79～387トンで推移している⁵⁾。一方、農林水産統計から推定した玄海地区全体の1978～2002年の漁獲量は1,000トン前後で推移し⁶⁾、その後は500～700トンに減少している⁷⁾。唐津港水揚量と農林水産統計から推定した漁獲量との差分は、活いか料理用として市場を通さない流通量と考えられる。

ヤリイカ水揚量は0.4～3.7トンの範囲で推移している。1980～89年には唐津魚市場に年間40～130トンの水揚げがあった¹⁹⁾ことから、当時と比べると大幅に減少している。

アオリイカ水揚量は05年の59トン以降、減少している。その前の期間1983～2002年の年間水揚量は48～88トンで²¹⁾、長期的にも減少傾向がみられている。5～8月頃に生まれ、漁獲され始める9月から翌年8月を一つの年級として計算された89～94年級群の水揚量は42～113トンであり、89～94年級群の中で、低温多雨だった93年級群は最少の水揚量、その翌年の94年級群は最少の親いから高温小雨の影響を受けて最大の水揚量となるなど²²⁾、沿岸浅所の藻場で産卵され幼稚仔期を過ごすことから、梅雨から夏季の環境により初期生残が大きく影響を受けている。

スルメイカ水揚量は366～947トンの範囲で推移している。

ソデイカ水揚量は03年の14.9トンと12年の12.5トンを除くと、2.0～5.6トンの範囲で推移している。

3. 月別水揚量の推移

2003年から2012年までの唐津港で水揚げされたこういか類、ケンサキイカ、ヤリイカ、アオリイカ、スルメイカ、ソデイカの月別水揚量を図2-1～6に示した。

こういか類は、いか籠、刺網、釣り、小型底びき網、定置網等により主に2～5月に多く水揚げされ、漁期前半はいか籠が主体となっている²⁾。こういか類の個別の水揚げはコウイカ、シリヤケイカ、カミナリイカの順でピークがみられている。一方、端境期の8～10月はほとんど水揚げされない。

ケンサキイカは4～10月に多く水揚げされ、ピークは今回まとめた10年のうち8年が7月にみられている。一方、11月～2月の水揚げは一般的に少ない。

ヤリイカは量的には少なく、主に12～4月に水揚げされ、5～11月は一般的に少ない。

アオリイカは4～7月の産卵大型群と10～12月の産まれたばかりの小型群の二峰型の水揚げがみられる^{22, 23)}。

スルメイカは10～3月に多く水揚げされ、4～9月は一般的に少ない。

ソデイカは11～1月の冬季に多く、2～8月はほとんど水揚げされない。

4. いか類の研究情報

こういか類については、いか籠の産卵基質として確保が難しくなってきたイヌツゲに変わる人工物に関する実験が行われている^{3, 4)}。

ケンサキイカについては、砂質の海底に産卵するとされ、2001年5月⁸⁾、02年6月⁹⁾には、呼子町小川島北沖の海域、03年には小川島～加唐島の間¹⁰⁾で、それぞれ潜水調査により卵塊が発見されている⁶⁾。陸上水槽において産卵基質の粒径選択性の検討^{11, 12)}、ふ化稚仔の人工飼育¹³⁾などが行われている。また、成熟^{14, 15)}、標識放流による移動状況¹⁶⁾や閉鎖系での酸素消費・アンモニア排出量¹⁷⁾等について検討が行われている。ケンサキイカの生物学全般については、河野¹⁸⁾に詳しく記載されている。

アオリイカについては、成熟や交接率の変化²⁰⁾、ふ化後の鰭部の形状変化や二次性徴²⁴⁾やアルコール麻醉法と外部標識²⁵⁾、九州北西部での漁獲実態²³⁾や移動²⁶⁾について検討されている。

日本海で漁獲されるスルメイカについては、水産庁主導の我が国周辺水域の漁業資源評価事業では「秋季発生群」とされており、九州北西部は幼生分布の南西端で、幼生は対馬暖流に運ばれて日本海の沿岸や沖合に散らばって成長する²⁷⁾。

ソデイカについては、沖縄県では年間2,000～2,500トン²⁸⁾、兵庫県但馬地区では1977年～95年では10～329トン²⁹⁾、それぞれ漁獲されている。最大で外套背長80cm、体重20kgまで成長するが、寿命は1年未満で、日本海での漁獲物は死滅回遊と考えられている³⁰⁾。

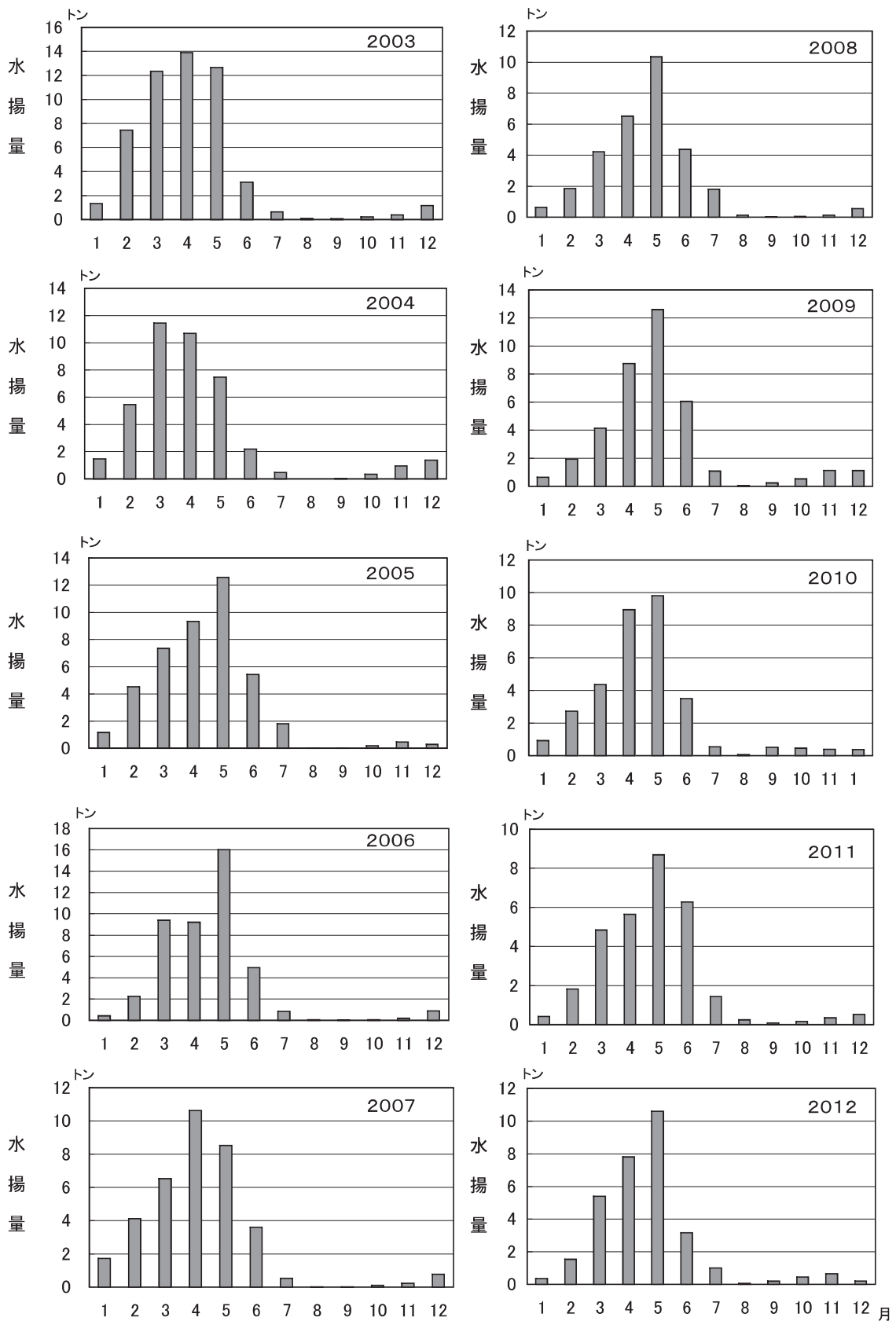


図2-1 唐津港で水揚げされたこういか類の月別水揚量の推移（2003～2012年）

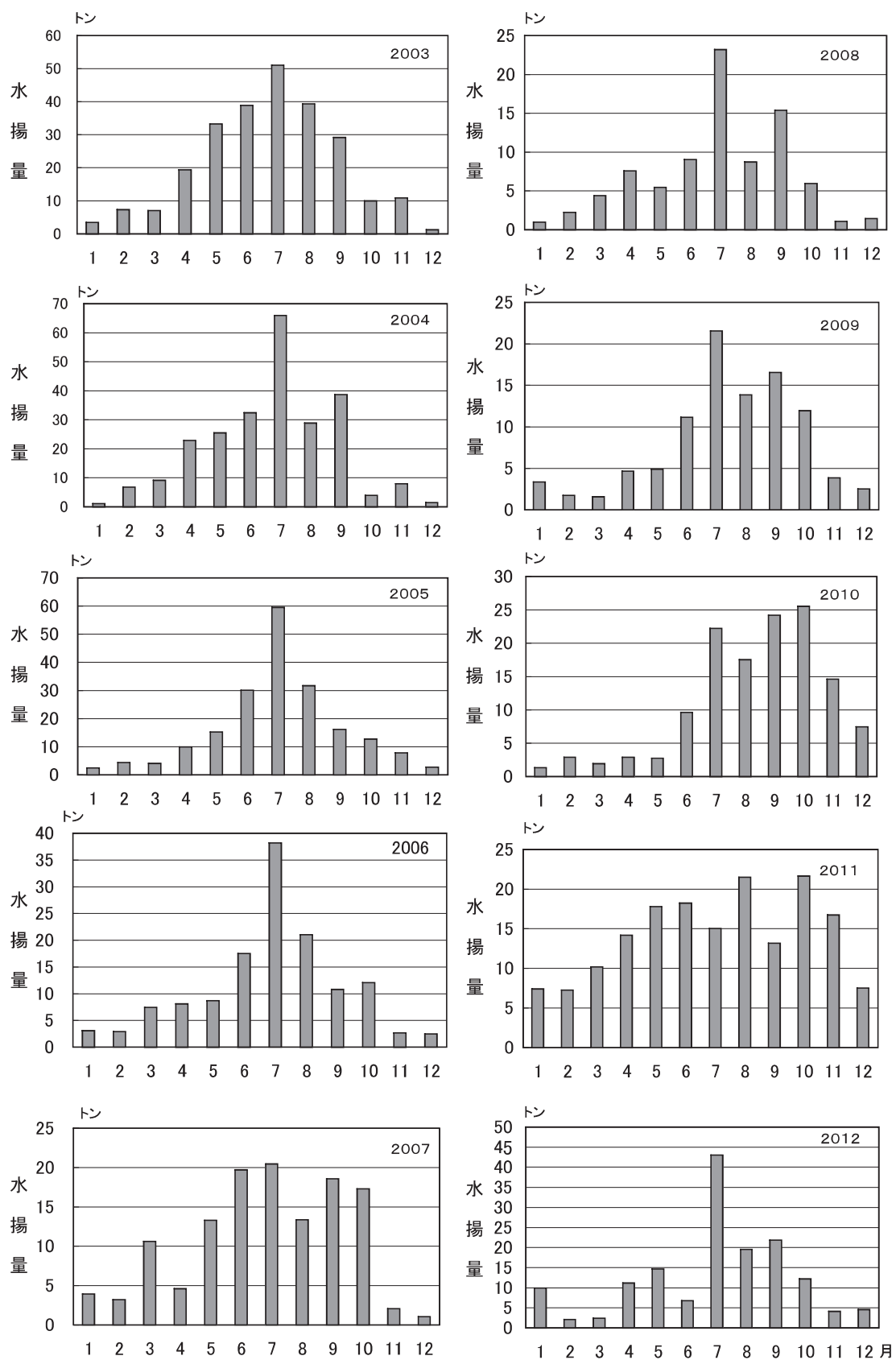


図2-2 唐津港で水揚げされたケンサキイカの月別水揚量の推移（2003～2012年）

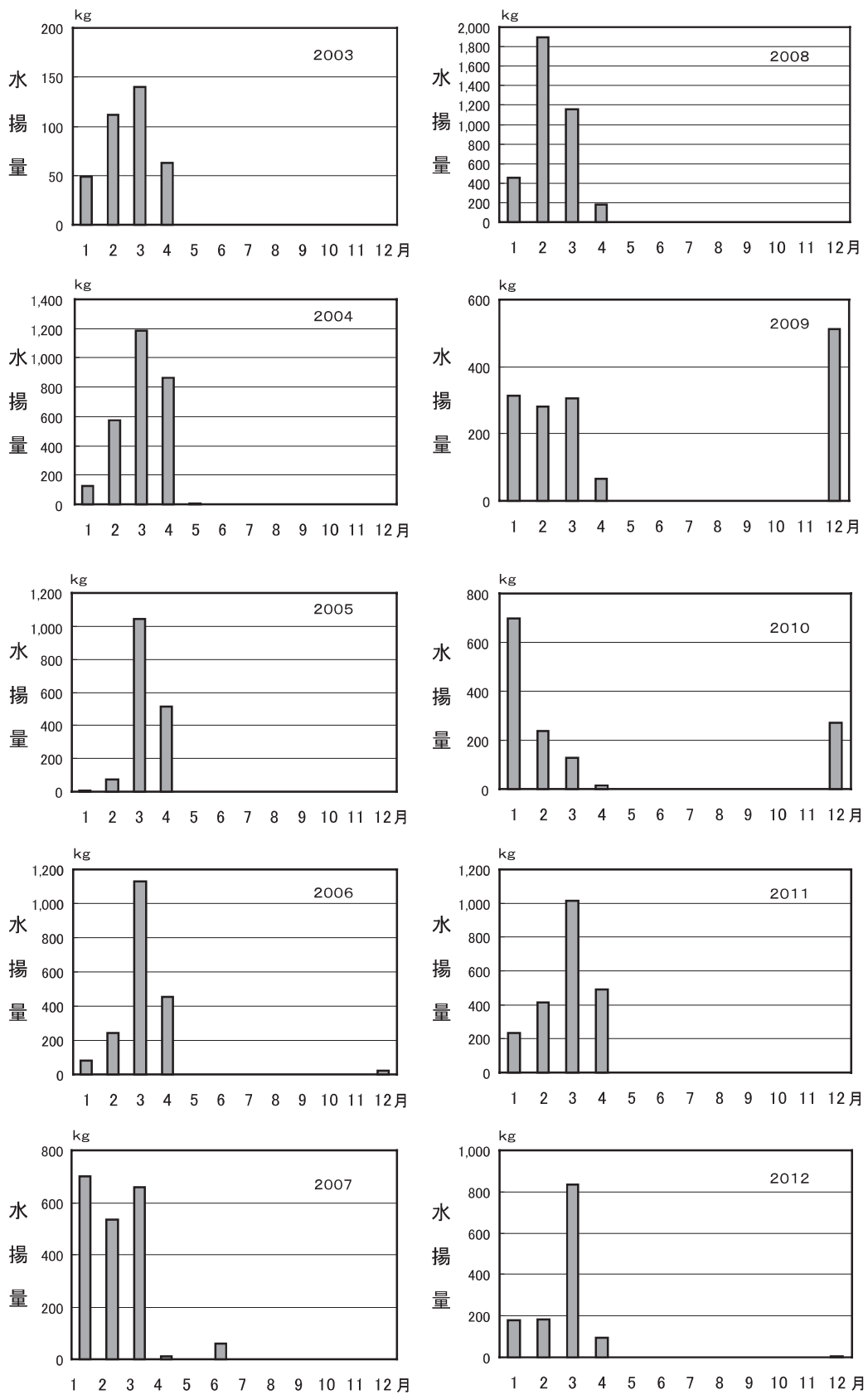


図2-3 唐津港で水揚げされたヤリイカの月別水揚量の推移（2003～2012年）

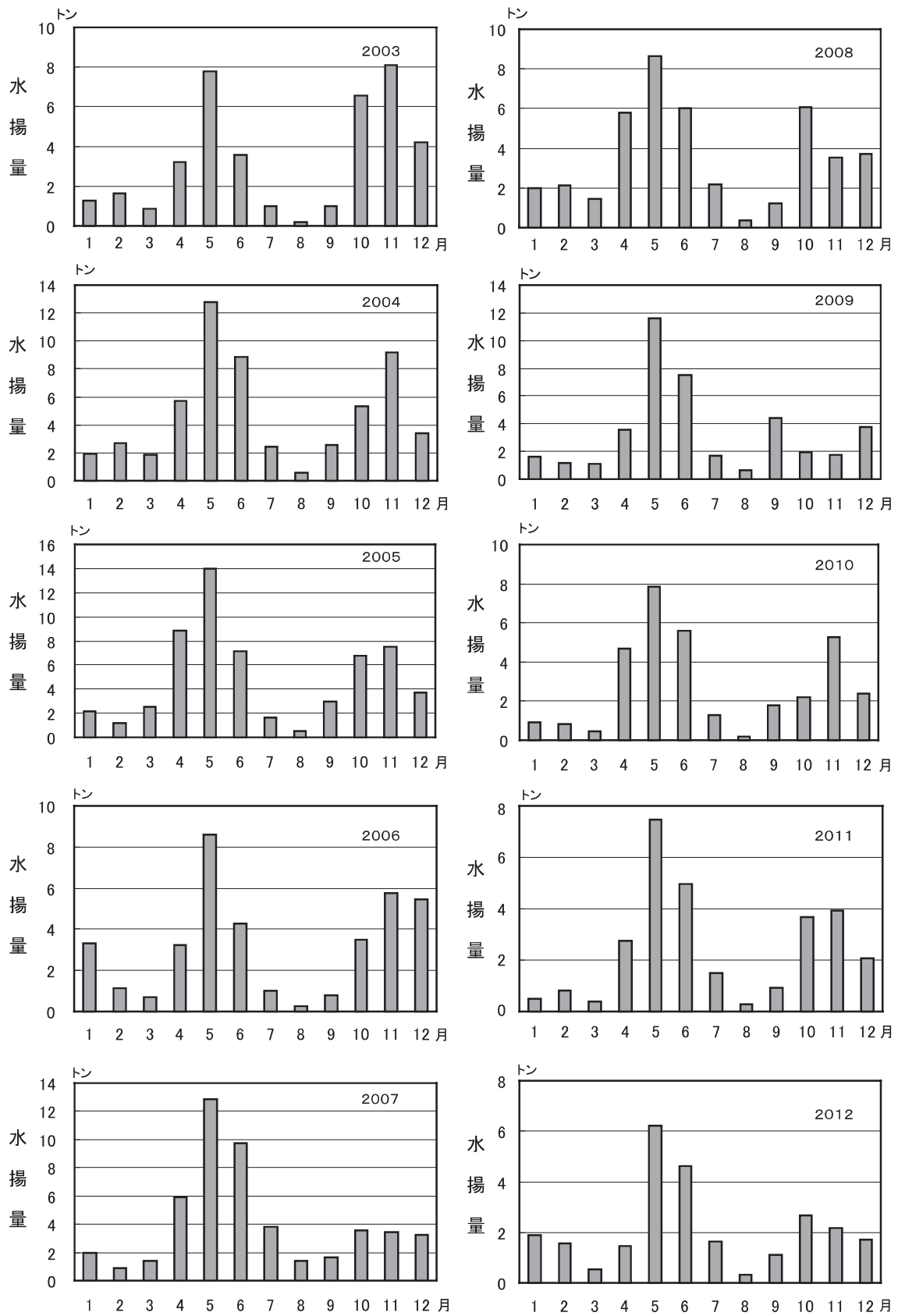


図2-4 唐津港で水揚げされたアオリイカの月別水揚量の推移（2003～2012年）

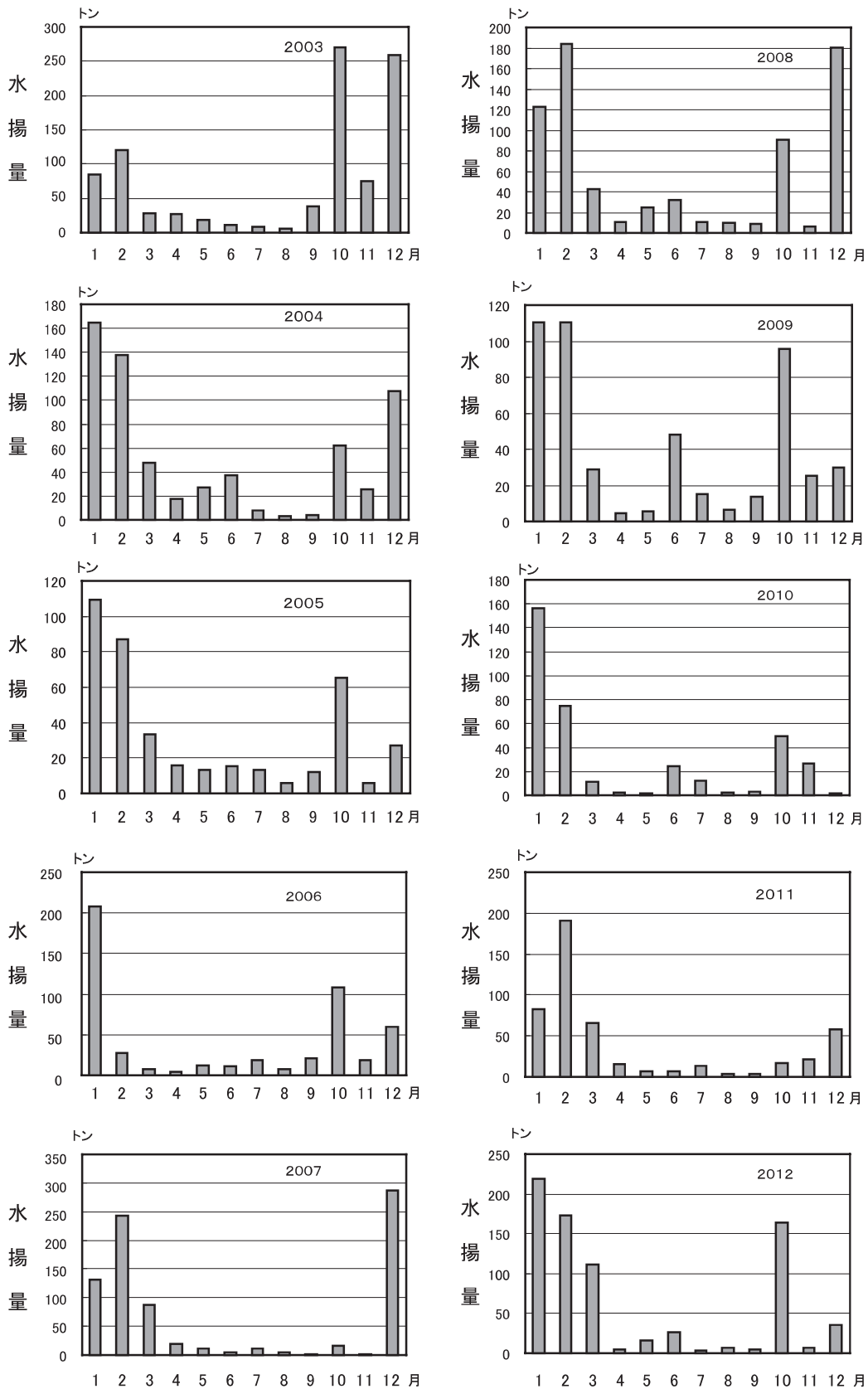


図2-5 唐津港で水揚げされたスルメイカの月別水揚量の推移（2003～2012年）

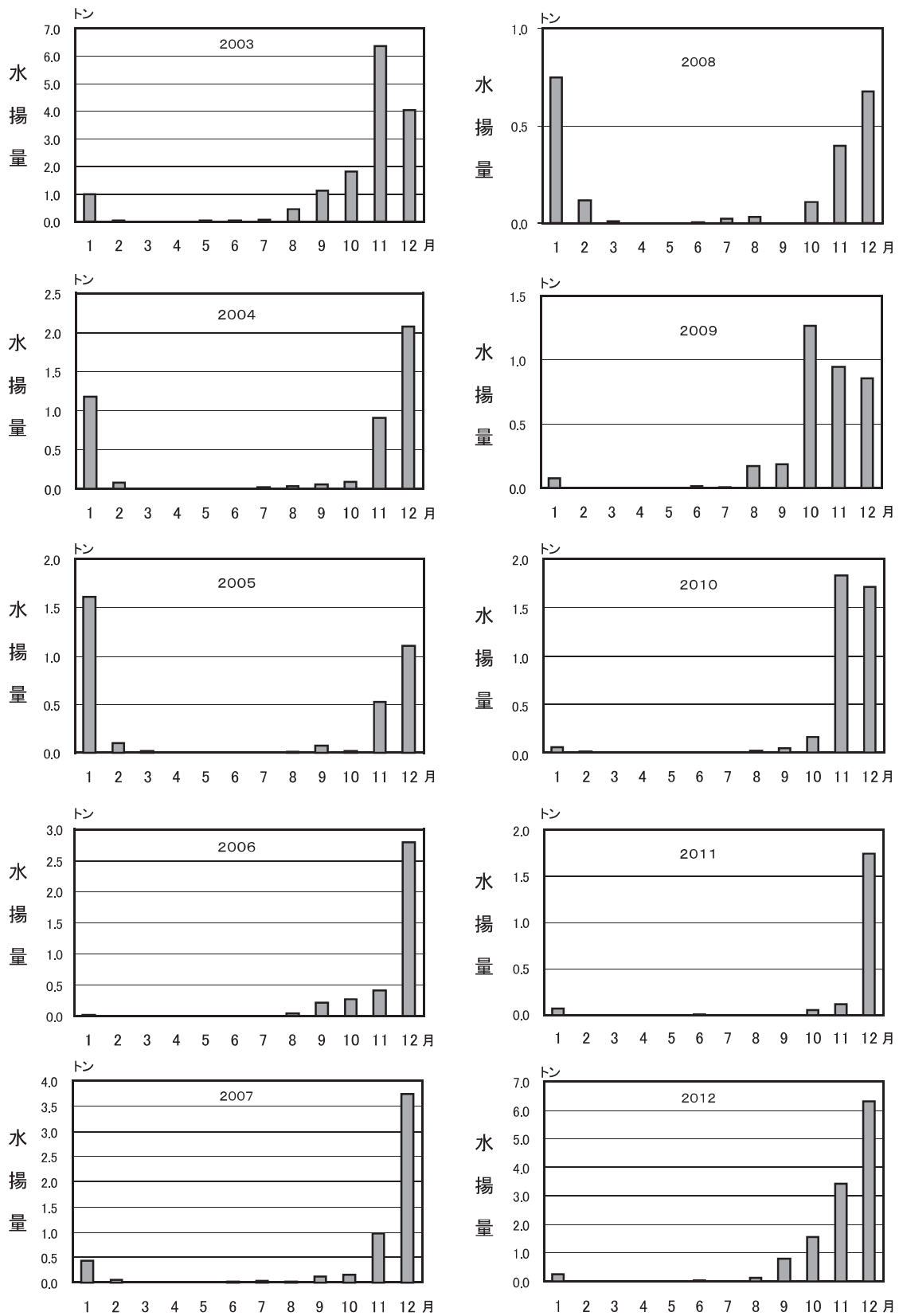


図2-6 唐津港で水揚げされたソデイカの月別水揚量の推移（2003～2012年）

文 献

【こういか類】

- 1) 野田進治 (1998) : コウイカとイカ籠の産卵基質について. 佐玄水振セ News, **2**, 1-2.
- 2) 野田進治・古賀秀昭 (2005) : 佐賀県玄海域におけるイカ籠の形状と漁業形態. 佐玄水振セ研報, **3**, 17-19.
- 3) 野田進治・野口弘三・古賀秀昭 (2005) : イカ籠を用いたコウイカの産卵基質試験-I. 佐玄水振セ研報, **3**, 21-24.
- 4) 野田進治・野口弘三・古賀秀昭 (2005) : イカ籠を用いたコウイカの産卵基質試験-II. 佐玄水振セ研報, **3**, 25-30.

【ケンサキイカ】

- 5) 首藤俊雄・増田裕二・荒巻 裕・古賀秀昭 (2005) : 漁船漁業振興対策事業(2)新漁業管理制度推進情報提供事業. 平成14年度佐玄水振セ業報, 2-27.
- 6) 荒巻 裕・野田進治・首藤俊雄 (2005) : 佐賀県玄海域におけるケンサキイカの生態-I 漁獲状況, 資源動態, 成熟・産卵期, 分布. 佐玄水振セ研報, **3**, 1-17.
- 7) 山口忠則 (2013) : 佐賀県松浦海区のコウイカ類とケンサキイカの漁獲量推定方法. 佐玄水振セ研報, **6**, 129-130.
- 8) 野田進治・鷺尾真佐人・首藤俊雄・柴山雅洋 (2003) : ケンサキイカ増殖技術開発試験. 平成13年度佐玄水振セ業報, 23-32.
- 9) 野田進治・荒巻 裕・古賀秀昭 (2004) : ケンサキイカ増殖技術開発試験. 平成14年度佐玄水振セ業報, 23-41.
- 10) 荒巻 裕・首藤俊雄・古賀秀昭 (2005) : ケンサキイカ増殖技術開発試験. 平成15年度佐玄水振セ業報, 23-41.
- 11) 荒巻 裕・野田進治・鷺尾真佐人・藤崎 博・柴山雅洋 (2005) : 佐賀県玄海域におけるケンサキイカの生態-II 産卵生態と環境. 佐玄水振セ研報, **3**, 9-15.
- 12) 江口勝久・金丸彦一郎 (2013) : 産卵実験によるケンサキイカの産卵基質粒径選択性. 佐玄水振セ研報, **6**, 5-7.
- 13) 江口勝久 (2013) : ケンサキイカ孵化稚仔の65日目までの人工飼育. 佐玄水振セ研報, **6**, 1-4.
- 14) 佐賀県玄海水産振興センター (1996) : 沿岸重要資源委託調査 (ケンサキイカ) (昭和63年~平成元年度). 平成元年~3年度佐玄水振セ事報, 160-166.
- 15) 鬼塚千波里・金丸彦一郎・柴山雅洋・山口明彦・及川信・竹田達右・松山倫也 (2007) : 佐賀県唐津港に水揚げされたケンサキイカの生殖腺成熟度. 佐玄水振セ研報, **4**, 39-44.

- 16) 佐賀県玄海水産振興センター (1996) : ケンサキイカ標識放流事業 (平成元年~3年度). 平成元年~3年度佐玄水振セ事報, 160-166.
- 17) 佐賀県玄海水産振興センター (1996) : 活魚リハビリに関する研究 (平成元年~2年度). 平成元年~3年度佐玄水振セ事報, 167-168.
- 18) 河野光久 (2007) : ケンサキイカ *Photololigo edulis* の資源生態 (総説). 山口県水研研報, **5**, 81-98.

【ヤリイカ】

- 19) 佐賀県玄海水産振興センター (1996) : 漁業況予報事業 (平成元年~3年度). 平成元年~3年度佐玄水振セ事報, 1-96.

【アオリイカ】

- 20) 金丸彦一郎・野田進二・伊東義信・野口弘三・古賀秀昭 (2007) : 佐賀県玄海域におけるアオリイカの産卵実態. 佐玄水振セ研報, **4**, 59-68.
- 21) 野田進治・首藤俊雄・古賀秀昭 (2005) : 資源管理型漁業推進総合対策事業. 平成14年度佐玄水振セ業報, 47-61.
- 22) 金丸彦一郎 (1997) : 九州北西部海域におけるアオリイカ漁獲実態. 日本海ブロック試験研究集録, **36**, 9-18.
- 23) 異儀田和弘 (1991) : 佐賀県玄海域におけるアオリイカの漁業と生態について. イカ類資源漁海況検討会議研究報告 (北海道区水産研究所), 92-93.
- 24) 金丸彦一郎・伊東義信 (1996) : アオリイカ幼稚仔の成長にともなう鰭の発達と二次性徴の発現. 栽培技研, **25** (1), 15-20.
- 25) 金丸彦一郎・梅田智樹・大津安夫 (2007) : アオリイカ外部標識法の検討. 佐玄水振セ研報, **4**, 45-50.
- 26) 金丸彦一郎・梅田智樹・森川 晃 (2007) : 九州北西部海域におけるアオリイカの移動回遊. 佐玄水振セ研報, **4**, 51-57.

【スルメイカ】

- 27) 後藤常夫 (2010) : 2章 “湖” の中のスルメイカ—日本海とスルメイカの関係って?—. 新鮮イカ学. 奥谷喬司編, 東海大学出版会, 35-54.

【ソデイカ】

- 28) 渡辺利明・金城清昭・鹿熊信一郎 (2005) : 沖縄周辺海域でのソデイカの分布と移動報告 (要旨). 平成16年度イカ類資源研究会議 (日本海区水産研究所), 1.
- 29) 武田雷介・反田 実 (1997) : 但馬海域で漁獲されたソデイカについて. 日本海ブロック試験研究集録, **36**, 1-7.
- 30) 宮原一隆 (2010) : 9章 ソデイカの袋小路—日本海のソデイカ漁業とその資源—. 新鮮イカ学. 奥谷喬司編, 東海大学出版会, 175-199.